

詰んでる国の王女様

花見月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平凡な事務員として働き、歴史と雑学、そしてとあるジャンルのネット小説と一部のゲームを愛していた彼女。しかし、ある時目が覚めると……自分は、色んな意味で詰んでる国の継承権すらない末の王女という存在だった。

良く言えば優しいが、悪く言えば頼りなく優柔不断で、歳のせいか体調を崩している父である王。

貴族に降嫁したと言うのに娘達にも甘い父のせいで、王家の財産すら食い荒らす二人の姉達。

そんな姉を娶った大貴族を筆頭に、暇さえあれば私腹を肥やそうとする腐った貴族達。

国一番の大貴族の娘を婚約者とし貴族達を後ろ盾として威張り散らす脳筋バカの第一王子の長兄と、太った愚者だと周囲に思われるように演技をしつつ虎視眈々と影で王位を狙う小賢しい第二王子の次兄という国内が真つ二つに別れて内乱待ったなしというこの状況。

問題は山積みなのに解決策がなくて、この国の将来は詰んでる!?

これから逆転するにはどうすれば良いの？

いや、状況的に無理？

いつそ国を見捨てて逃げた方がいい？

そもそも、なんでこんな国の王女に生まれたのよ……と思いつつも剣と魔法の世界に生まれたんだからとやりたいことをやりたいようにやる、国も世界も救うつもりのない、平穏な自分の未来のために

がんばる彼女の話である。

◆簡潔なあらすじ。

- ・早い話が、ラナー王女成り代わり
- ・成り代わりの彼女はオーバード (WEB版・書籍版・アニメ版) を全く知らない
- ・そのせいで王国や帝国の地図、組織、人間関係が大幅に原作と変更される

・この物語は、彼女の記憶が戻ってからナザリックが転移して来るまでの物語

・なお、プロローグがこの小説の最終回になるという壮大なネタバレ

◆重要なこと

- ・女性向けに多い宮廷絵巻的な味付け (妃同士の争いとか確執とか愛憎、令嬢同士の足の引っ張り合いとか) マシマシになります。
- ・オーバードの世界観を使ったオリジナルに近い何か……という小説です。

目次

06	兄妹愛—前編	47
05	知情意	37
04	幼馴染	27
03	分水嶺	16
02	プロローグ	12
01		8
		4
		1

プロローグ

「――姫様、大変です!!」

執務室の白亜の扉をバタンと大きな音が立つほど勢い良く開けて、質の良い黒のお仕着せを身に着けた一人のメイドが紙の切れ端を握りしめて入ってきた。

本来なら扉の前にいた騎士らしい優男が、執務室に入るこの侵入者を止めるべきなのだが、何の反応もしない。

ここに来たのが、領主お抱えの魔法研究室付きの侍女である見知った彼女であったため、そのまま通したのだろう。

「騒々しいですね、ツアーレ。何があったのですか」

使い込まれた重厚な机にて書類にサインをしていた、淡いブルーのドレスを纏い人形のように美しい金髪の少女が手を止めて、軽く首をかしげながら、入ってきたメイドを見やった。

「それが……トブの大森林付近の開拓村が帝国の鎧をつけた狼藉者達に襲われていると連絡が」

ツアーレと呼ばれた美人というよりはかわいらしい、金の髪をきれいに肩で切りそろえたメイドは、手にしていたメモ書きを少女へと差し出した。

「帝国？ 変ですね……帝国とは話がついているから、私の領土は不可侵のはず」

少女は差し出された紙の上の文字に、さっと目を走らせると、やがて頭痛を耐えるようにこめかみを押さえて呻く。

「……あの脳筋共、また独断で……」

少女の脳裏には、ペアにして組ませている二人の平民の男が頭に乗かんでいる。

一人は剣の腕は微妙ではあるが、礼儀正しく正義感に燃え、忠犬のように少女を慕う未だ十代と若い金髪の青年。

一人は剣の道に関してだけはストイックで、国が誇る最大戦力と言われる戦士長に並ぶ腕を持つが、基本的に生活力がなくならない三十路のダメ男。

全く反対の二人だが基本脳筋であることに変わりなく、深く考えずに正義感で突っ走る青年にダメ男が渋々付き合うことで独断行動になることが多かった。もちろん逆のこともままあるのだが、今回は前述その通りのようであった。

「巡視対象の開拓村が複数、襲われて廃村化と……んー、薬草園のあるカルネ村が襲われてなければ、とりあえず良いんですが……。あの二人と一緒に居てるのは、アルシエ？ それとも、セリーシアだったかしら？」

「セリーシアでございます。妹がお二人を止められず、申し訳ございません……」

申し訳いと顔色悪く、ツアーレが跪く。

「それは、大丈夫よ。あの二人を抑えるなんて、彼女達では無理ですもの。アレを止められるとしたら、魔術師ならデイバーくらいでしょう？ とにかく、そのままその二人を追ってフォローをするようにと……あ、それと。その帝国兵士は状況から考えるに法国からの工作員かもしれないから、敵わない場合はさっさと逃げるように伝えてくださいね」

「かしこまりました」

「ええと、あとは……そうですね。ねえ、マルムヴィスト。ルベリナとエドストレームの手は空いてます？」

くるりと扉の外に立っていた騎士らしい優男へと振り向いて声をかける。

「ええ、その二人なら暇を持て余していますよ。今頃……恐らく訓練場で、兵士を虐めてるんじゃないですかね」

肩を竦めてマルムヴィストはそう答えると、少女はかわいらしく口元に左の人差し指を置いてしばし考え込んだ後に口を開いた。

「そう。じゃあ、その二人は至急カルネ村まで向かうように指示を。狼藉者は数名尋問用に残せば残りは好きなように玩具殺してしまってもにしてかまいませんわ。だから、村人達はなんとしても確実に救うように言って下さいね」

「了解しました、姫さん」

「全く、あそこの薬草園を潰されたら、我が領の収入が半減どころ騒ぎじゃありませんよ……やつと軌道に乗ってきたところなのに」

ため息を付きながら、姫と呼ばれた少女は困ったように頭を左右へ振った。

カルネ村には、この少女が指示して作らせた薬草園が隣接しており、少女が領主を務める領収入の要の地点であったのである。

「ああ、それなら。隊長にも行つて貰った方がいいんじゃないですかね？ その方が早く制圧できると思いますが」

「ゼロにもですか？ そこまで手を割かなくても大丈夫だとは思うんですけど。まあ、暇だったら行つてくれてもいいですわ」

「どちらかというと、味方の暴走の足止めの意味が大きいですねえ……特にルベリナがやべえ」

身震いするマルムヴィストに少女は、ルベリナの二つ名を頭に浮かべて納得すると、ゼロも一緒に行くように伝えれば、彼は足早に外へと去っていく。

「とりあえず、これで続報が入るまで休憩としましょう。ツアーレ、お茶の用意をお願い」

「かしこまりました、姫様」

入室してきた時とは逆に、静かにメイドは退室していく。

一人残された少女は窓の外を見ながら、祈りを捧げるように少女は手を組んだ。

「……ふう、これでなんとかなると良いんですが」

彼女の名前はラナー・ティエール・シャルドロン・ライツ本来、書籍版ならライル、web版ならランツが正しい・ヴァイセルフ。

由緒正しい、リ・エスティーゼ王国の第三王女であり、若干17歳という若さながら、エ・ランテルからトブの大森林の一部を含む領地を治める大領主だった。

そして、続報が来た時にとんでもない爆弾が、カルネ村にあることを彼女は知ることになる。

現代日本から、異世界に転生——これはよくある題材だ。一次創作、二次創作のどちらでも。

そして、前世とも言える記憶や、特典やチートなどを持っていて、ストレスフリーなことも特徴だったりする。

最近だと、冒険者パーテイから追放された主人公による「もう遅い系」や、乙女ゲーの悪役令嬢主人公物の「逆転ざまあ」展開なんか人気だった。

私もそういったものは好んで読んでいた方だし、いつか死んで異世界に転生したら……なんて、中二病なことを考えたものである。

しかし、現実となった今となつては、なんて浅はかだったんだろうとしか思えない。

というのも私は、どうやら地球ではない異世界のとある国の王族？の末姫、第三王女として転生したらしい。

ラナー・テイエール・シャルドロン・ライツ・ヴァイセルフ——これが今の私の名前だ。

年齢は三歳で、自分という意識が戻ったのがついさっきのことだから、もしかしたら転生ではなく憑依なのかもしれないが、少なくとも走馬灯のように、この身体の今までの記憶が蘇っており、頭痛がしている。

この国は、リ・エステイーズ王国というらしい。

良く言えば優しいが、悪く言えば頼りなく優柔不断で、高齢で歳のせいか体調を崩している父である王。

貴族に降嫁したと言うのに甘い父のせいで、王家の財産すら食い荒らす腹違いの姉である第一王女レナーテ原作では名前は判明していないと第二王女サーナ原作では名前は判明していない。

国一番の大貴族の娘が婚約者になったことから威張り散らす脳筋バカの第一王子バルブロと、勉強嫌いの太った怠け者だと周囲に思われるように演技をしつつ虎視眈々と王位を狙う第二王子ザナック。

そして、暇さえあれば私腹を肥やそうとする腐った貴族達。

将来は間違いなく、貴族によるクーデターなり、王子による王位継承戦りの内乱が起きそう。

なお、これはすべて元のこの子が思っていた評価と考察。

え、この子つてば、天才過ぎない……？

普通は三歳で、ここまで周囲を把握してないし、理路整然としてない。

蘇った記憶に私は呆然とした。

あまりにも頭が良すぎる。

三歳にして、この思考回路ってなんだ。

さすが、異世界。とんでもない天才がいる。

……今は、私だけ。

そして、私は少し申し訳なくなった。

こんなハイスペックのこの子の本来の魂を上書きしてしまったのではないかということに。

憑依ならまだどこかにこの子の魂があるかもしれないけれど、それらしきものは全く感じないから望みは薄い。

これが一つめの後悔。

二つめはこの国の状況があまりにも詰んでいること。

国王が高齢でも代替わりしていないのは、そもそも父は第三王子で国王になる予定が無かったことが発端になる。

父は臣下になる予定で教育され、第一王子の王太子が戴冠する際に王家直轄地を割譲されて、公爵となるはずだった。

しかし、王太子が戴冠間近に流行病で倒れ、スペアであった第二王子に王位が転がりこみ、第三王子だった父はその次兄のスペアとして王族に留まらなければならなくなった。結婚も兄（第二王子）がしていないからできなかった。

第二王子は戦争狂で国王として戴冠した後も、結婚もせず周辺に火種を振りまき、戦争を起こすがその戦争が元で亡くなった。

そして第二王子が始めた戦争を終わらせるために、第三王子であった父は国王にならざるを得なかった。

即位後、結婚するものの長く子供に恵まれず、やっとできた子供も

生まれる前に最初の妃は次代の国母を出すことを計画していた貴族に暗殺された。妃を愛していた父はその貴族を取り潰し、十数年も喪に服すことになった。

その後、しばらくして二人目の正妃を迎え、生まれた子供も世継ぎとなる王子ではなく王女。その次に生まれた子も王女だったことから、仕方なく第二妃を迎えることに。そして、兄達や私が生まれた。

ちなみに。この国の王位継承権は基本は男性のみで、同腹ならば年長者から継承順位が与えられるのだが、女性の王位継承権は男性の王族がないときに暫定的に与えられ、配偶者となった者が国王になる。男尊女卑の世界だから、これは仕方ないと思う。

つまり、兄達が生まれなければ、第一王女であるレナーテの夫が国王になっていた。

彼女が嫁いだのは六大貴族と呼ばれる大貴族の一人、ペスぺア侯で貴族の当主としては一番若い。三年前の十八歳の時に結婚し、すでに子供が一人いる。

もう一人の姉の第二王女はウロヴァーナ辺境伯の跡継ぎである孫に昨年嫁ぎ原作では嫁ぎ先は判明していない、子供はまだできていないが夫婦関係は良好であるらしい。

……まあ、その割には父の機嫌を伺うという名目で、王城に良く姉達は来ているようで、帰りには馬車に大量に父からもらった贈物を積んでいるのを知っている。

そして、ここで疑問になるのはそれなら何故、第一王子のバルブロが王位を継いでいないのかと言うことだが、理由は先代の王（父の兄である第二王子）の性格とあまりにもバルブロが似ており、国王としての心構えも資質もないと父は判断している。そして、第二王子のザナックはまだ幼い上、王族らしい気品もカリスマも感じられない。これでは、どちらが後継となっても貴族の操り人形にしかならないと危惧しているのだ。

世継ぎ予定の王子達の内、かろうじて成長度合いによってはマシと言えそうなのは第二王子だけど、現状どっちを選んでも詰んでいるようにしか思えない。

さつさと、どちらかを王太子に指名してしまえばいいのに。それによつて私の方針だつて変わる。

妃達や姉兄、私に対する態度から考えれば、父は、家族を愛する良い王なのだろうとは思ふ。

しかし、施政者としては問題外だ。

前世の記憶から考えれば、封建制度から中央集権に移行しない限り、このままでは国王なんて君臨せずとも統治はせず。ただのお飾りになるか、いろいろな責任を押し付けられて断頭台に登ることになる。

私は別に人間皆平等だとか、人権擁護だとか、民主政治にしろとか、貴族制廃止しろとかそんなことは思わない。偽善者じみたそんなのはどうでも良い。

なんで特権あるのにそれが行使できない世の中になんてしたがるの。折角、生まれだけはサラブレッドなお姫様に生まれたんだから、それが活かせる生活はしたいじゃない？

そうになると、一番望みがありそうなのは、政略結婚で隣国のバハルス帝国に輿入れすること。

あそこは、王子が多かつたし年齢的には釣り合う相手は何人かいたはずだけど、名前や人となりなんかは私の元のハイスペックの子もわかつてなかつたようだから、後々調べないければいけない。

とまあ、私の現状はあまりよろしいものではないのだ。

でも、私もまだ三歳なので、やれることは少ない。

ここが剣と魔法の世界であることだけは確かなので、折角だからそちら方面でも色々やりたいことはあるし、現代知識チートみたいな何かで内政を頑張るのも良い。

……まあ、詰んでる国の王女様だけど。

はろー、脳内の友人たち。私は、なんとか元気です。

三歳ということは、おそらく、そろそろ本格的な王族教育が始まる
とは思うんだけど、特に何事もなく。

普段は乳母や侍女、護衛兵に見守られながら、先生に読み書きを習
う振りをして（実は、記憶が戻る前の私……めんどくさいので今後は
オリジナルちゃんと呼びたい……が読み書き完璧だったので。さす
が天才こわい）ただただ城の図書室や自室で本を読む毎日で。

そんな様子から、いつのころからかひっそりと王城の使用人達によ
ばれる名前は「本の姫様」。

それって、どこの本好きとかビブリアオマニアで、本のために
色々やらかして平民からツェントに下剋上しそうな地雷娘のことな
のかと心のなかでツツコミを入れる日々。

さて。そんな私なのだが、今日は乳母と侍女達に飾り立てられた後
に、初めてのお出かけである。

といっても、街が見られるわけではなく、馬車で王都郊外の天幕を
貼られた広い場所に連れてこられた。

三歳児でも朝から準備して化粧しなくちゃいけないのはなんとか
ならないものか。

侍女たちは「軽く紅を引くだけにしましょうね」とか言ってたけど、
それすらいらないうが。

こちらら、金髪碧眼の約束された勝利輝く、可愛いかわいい美幼女
様やぞ。母親の第二妃がとても美しいので、ほんと将来が楽しみ……
まあ、性格は割とアレなのが第一王子見ればわかるけど。

この化粧品とか衣料なんかの染料にも手を入れたいなあ。

この世界、中世〜近世間近レベルの文化レベルだとすると化粧品や
染料に鉛とか水銀、ヒ素なんかが使われてるんだよね。これを使わな
い製品を作れば健康問題や美容の面から言っても売れそう。

知ってる？ 歴史を振り返れば、肌をきれいに見せる白粉と紅には
鉛と水銀が使われていたんだよ。染料にもヒ素が使われているもの

もあって、その色で染めた壁や家具を置いたり、服を着たら死ぬって
いう恐ろしいものだった。

いくら魔法がある世界とは言え、多分この辺りってそこまで考えら
れてないと思うのだ。染料はともかく、化粧品なんて、この時代だと
女性以外で手に取る人はいないし、それが身体に悪いとか考える人間
自体いなさそうなもの。

うん、大きくなる前に化粧品や服飾を発展させたいね。ドレスのデ
ザインや刺繍の種類が少なすぎるし。折角異世界に生まれたんだか
ら、そういうのに手を付けてもいいよね？

まあ、今回着せられたプリンセスドレスは、長めのトレーンがつい
た淡い水色のチュールとレースでできたバルーン袖の可愛いもの
で、年相応で満足はしているけど。

天幕の外には、特設の闘技場のようになつたスペースができてお
り、それが見渡せるように階段状の王族観覧席と貴族の席が設けら
れ、更に離れた席に一般の観覧席が設けられていた。

階段状になつた王族席の特等席には父王、その両隣に正妃と第二妃
の席があつて、その一段下に第一王子と第二王子の席、そして私の席
がある。

でもって。

ここまで来てなんだが、私は説明らしい説明を受けていない。

周囲の様子を見る限り、どうも御前試合？　が行われるらしい。

第一王子のバルブロが偉そうな態度で、第二王子のザナツクに解説
しているのが聞こえたので。

予選は、この特設会場で大々的に行われ、御前試合となるのは準決
勝戦と三位決定戦、それから決勝戦の計四試合だそうだ。

優勝者には、王から直接のお褒めの言葉と名誉の剣と褒美が贈られ
るとのこと。

それにしても、幼女の初めてのお出かけが御前試合ってどうなんだ
ろうか。

もうちよつとこう……将来の婚約者を見据えて貴族の子供達との
お茶会とかさ、何かあつたのではないかと思うのだけど。

まあ、そんなことを夢見ても現実はコレなので。ああ、世知辛い。試合は剣とか槍とか武器使用によるものらしいけれど、私は正直魔法の方が興味あるんだよね。

異世界転生のテンプレに漏れず、幼少から鍛えれば魔力も上がるのでは!? とか思ってた鍛えようとしたけれど、どうにも私には才能のさの字もなかったようで、魔力なんてものは感じられなかった。

図書室にある魔法系の本とかも読んでみたけれど、どうもこの国は魔法使いを軽視している気がする。

隣の帝国には、フルルータとか言うところでもない大魔法使いがいるらしいのに、なんでこの国にはそういうすごい人が王城に仕えていないのだ。これでは弟子入りもできないじゃない。

そんな事を考えながら、化粧品と染料の開発やら魔法が使えないなら魔法使いが部下にほしいなあとか、将来に思いを馳せてぼーっと試合を見ていたせいで、気がついたら決勝戦だった。

片方はなんだか、チャライ感じの胸当てくらいしか防具をつけていない若い男。

審判の紹介によれば、「常勝無敗の剣の天才」ブレイン・アングラス。

相対するのは、ブレインよりは年上そうな使い込まれた剣を構えている男。

審判の紹介によれば、「歴戦の傭兵」ガゼフ・ストロノーフ。

そして、試合が開始され、私はブレインの戦い方に目を奪われた。

あれは剣ではなく刀……打刀での戦い方だ。

居合いのような構え方や、足運びなど間違いない。

なんでそんな事わかるんだって？

前世の私は歴史が大好きだった。世界史や日本史など、歴史ロマンを感じるものは大体読んだし、調べ上げた。時代劇が大好きで、殺陣や刀のきれいな振り方が知りたくて、わざわざ剣術（剣道ではない実践型）道場にすら通った程。自分ではできないが、達人と呼ばれる人の戦い方は目にして覚えている。

惜しいなあ。

あの動きをちゃんとした刀でやれば、かなり綺麗な動きだ。シヨートソードでやっているから、どう見ても不格好。

結局、ブレインはガゼフと接戦するものの、負けてしまった。

勝者のみがその場に残り、敗者が去ろうとする後ろ姿を見て、私はふと思う。

そういえば、この世界にも刀つてあるんだらうか。

今まで見たこと無いけれど、多分探せばあるはず。

それなら、刀使いなんて希少種を今逃していいの？

天啓を受けた私は、慌てて乳母にお願いして、たつた今敗者となつたブレインの控え室となっている天幕へ連れて行くように頼み込んだ。

分水嶺

重い足取りで、一人の男が天幕の間を歩いている。

(くそっ……勝てなかった……！ 何が”常勝無敗の剣の天才”だ)

彼の名前はブレイン・アングラス。

農民の子として生まれたが剣の才能に恵まれ、成人するやいなや村を飛び出して、傭兵や用心棒として身を立っていた。

それまで負けたことなどなかった驕りも有り、御前試合の報奨金目当てで応募したのだが、決勝にて、対戦相手であるガゼフの武技に負けた。

優勝はできなかったが、二位もそれなりの報奨金は出る。それを元手に新たな武器を買い、雪辱を果たすべく剣の高みを目指すと心に誓い、己の控室に割り当てられている天幕へと向かう。

しかし、その天幕の前でブレインは立ち止まった。

中に複数の人の気配がしたからである。

(他の負けた参加者が腹いせにでも来たのか?)

いつ襲われても対処できるように気を配りながら、入り口の帳を跳ね上げるようにして中に入る。

「……やつと来ましたね。すぐこちらに来ると思ったのに」

御前試合で負けた男を待っていたのは、光り輝くような美しい幼女だった。

繊細なレースでできたドレスを纏い、室内に置かれた椅子に座ってこちらを見上げている。

その幼女の傍らには、一目で高位貴族の奥方とわかる豪華なドレスを着た品の良い女と、先程王族達の側に居た近衛兵の一人がいた。

「ねえ、あなた。ブレイン・アングラスと言ったかしら？ すごいです！ そんな剣であんな戦い方ができるなんて。あなたって本当に天才なのね！」

幼女が椅子から飛び降りるようにして立ち上がり、褒め称える声に嘘はない。

聞きよによっては嫌味に取られかねないが、そこにあるのは純粹

な称賛だった。

思っていた者と違ったことと、かけられた称賛に面食らったブレインは、しばし呆けてしまう。

どう見ても、この汗臭い控室とはそぐわない人間がそこに居たからだ。

「は……？ いや、えっ……？」

ブレインは言葉にならない言葉を発しながら、思わずここが自分の控室に割り当てられていた天幕であったことを確認してしまうが、どこからどう見ても自分の天幕である。

「姫様がこのようにお褒めの言葉を下さっているというのに、その無礼な態度はなんですか」

幼女の保護者なのか、女がブレインを冷たく見つめる。

「この御方は、王国の珠玉の姫である、ラナー姫様です。惜しくも決勝で負けたとは言え、その剣の腕を見込んでお褒めの言葉を直接仰りたいと、わざわざこんな場所にまで足を運んで下さったですよ」

「はあっ!？」

女の言葉にブレインは、幼女……ラナーの顔をまじまじと見た。

どこぞの貴族の子供かと思えば、確かに御前試合の会場で王族席に座っていた場違いな幼女である。

「……やはりこのような礼儀も知らぬ下賤な者にお声をかけるなど……」

「あら、私は気にしてないですよ。きつと、突然で驚いているからでしょう？ イブル侯爵婦人はちよつと黙っていて下さる？」

ラナーは笑顔を浮かべて振り返り、眉をしかめている女を黙らせると、もう一度ブレインを見上げた。

「ねえ、ブレイン・アングラウス。あなた、私に仕えませんか？」

「姫様?! 何を仰ってるのですか! この男は平民です! まさか、そのためにここまで……?!」

「そうですよ。だって、表彰式で声をかけるのでは遅いのです。こんな逸材を逃すわけには行きません。だから、何度も言いますけれど、イブル侯爵婦人はちよつと黙っていて下さる? あまりうるさいと

お父様にお願いして乳母を替えてもらっても良いのですよ?」

流星にそれは困ると思っただのか、女は口をつぐんだ。

平民の子供では、まだ分別も物心もついているかどうかとも怪しい年齢だというのに、王族の子供というのは違うのか、ラナーは落ち着いていた。言葉遣いですら、完璧である。

「そんな両刃の剣でここまで戦えた。あなた本来の戦い方なら、その武器は向いていないことは自分でもわかっているのでしょうか?」

「お前……いや、姫様。なんでそれがわかった……のです……か?」

「ああ、普段通りの話し方で良いですよ。無礼とか思いませんから。私の知識は、本によるものです。あなたの構えは刀、それも打刀という種類の片刃の剣を使用するのでしょうか? あなたの本来の武器は折れたか壊れたか……とにかく、試合の時に使用できなかった」

驚いたことに、ラナーの指摘は正しかった。

ブレインが普段使用しているのは刀だ。故郷で最初に手にした剣は、森で拾った刀であり、それを相棒としてずっとやってきていた。

しかし、とある護衛の仕事でその刀についてヒビが入り、修理も絶望的と言われ、南方伝来の新たな刀を手に入れるためにはかなりの金銭が必要になったのだ。

「なのに、そのまにあわせの剣で決勝まで残った。これを剣の天才と言わずしてなんというのでしょうか」

「……それでも優勝できなければ、意味がない。俺よりもあのガゼフを誘えば良いんじゃないのか」

「その方に私は興味はありませんの。私はあなたが良いから、わざわざごさうしてここまで来たんですのよ?」

王族直々の誘いである。平民が断ることはできないのはわかっているが、誰かに仕えるということは首輪をつけられるようで、ブレインは知らずと苦い顔になった。

「私は、私を主人とする代わりに、機会をあなたにあげたかったのです」

「機会?」

「私を主人とするということは、あなたに自由はなくなるでしょう。」

それにより、面倒なこともあるのは間違いありません。その代わり、あなたの装備や必要なものは全てこちらで賄います。あなたはまだまだ強くなるはずですよ。あのガゼフよりも。強くなりたいなら、どんな協力も惜しみません」

そこまで話すとラナーは、ほうとため息をついた。

「まだまだ話したいことはあるんですが……申し訳有りません。少し、話疲れてしまいました……やはり、幼いと体力が持ちませんね」苦笑しながら、乳母のドレスの裾を掴み、帰る旨を指示する。

「仕えることを強制するつもりはありません。仕えたくなければそれで構いません。だから、返事は今すぐには申しません。じっくり考えて、返事を下さいね」

そうして、ブレインの横を通り、天幕の外へとラナー一行は出て行った。

やつほー、脳内の友人たち。

やっと、私に直接仕えてくれる人ができたよ。

ブレイン・アングラウスっていうの。刀使いの剣士なんだよ。

あの初めてのお出かけの御前試合の後にスカウトして、しばらくしてから是の返事を貰った。

御前試合から結構間が空いてたから、城門前でひと悶着合って、私のところに連絡来るまで結構時間かかったことは秘密。牢屋に入れられかけたらしい。

連絡系統もう少しなんとかしとけばよかった……すまんかったブレイン。この辺、王族は面倒だよねえ。

決め手は、なんでもブレインが決勝で負けた相手であるガゼフが、ヴェスチャーっていう人の元に弟子入り……っていうより、むりやり弟子入りさせられた？　というか。たまたま、その師匠にガゼフが連れて行かれるところを見たのだそうだ。

ヴェスチャー……確か、ローファン卿？（オリジナルちゃんの、この人には全く興味なかったのかぼんやりとしかわからない）だったかな。騎士爵持ちで、二元アダマントイト冒険者。城下に剣道場を構えていたから、御前試合も見に来ていたんじゃないかなろうか。

そういえば、お父様は御前試合のあとからずっとガゼフを騎士にしたい、自分に仕えて欲しいとものすごい推していた。

でも、「礼儀作法も何も出来ない傭兵風情を騎士だなどと……」と、貴族たちの猛反対を受けて諦めかけてたんだよねえ。

だから、ローファン卿がちゃんとその辺教えてくれてることを願う。お父様の余りない望みの一つだから、叶えてあげたい。それで、騎士にできるかどうかはわからないけどね。

まあ、とにかくブレインは、それでガゼフに師匠ができたから、一人でやることに限界を感じたらしい。

当初は、盗賊まがいの傭兵団にでも入って、対人戦の腕を磨こうと思っていたと話を聞いたときは、こんな貴重な人材が盗賊にならなく

てよかったと心底思ったよ。

私の部下になれば、対人戦の経験なら、王城内でも死ぬほど（比喻無しで）できそうだし。

平民だから、見下されるからね。大体、継承権もないような末姫が爵位みたいなもの用意できるわけがないのだ。

まず、大前提として、王族に仕える者達って貴族なんだよ。

騎士の中には平民出身の一代限りの騎士爵もいるけど、基本的に貴族出身だ。近衛兵ですら下級貴族の三男四男とかだったりする。

そして、料理とか洗濯といった汚れ仕事は平民がやってるけど、身の回りの世話をする女官や従者は高位貴族から選ばれてる。

だから、父王や妃たちの女官たちは言わずもがな、私の乳母もイヴル侯爵の婦人だし、バルブロ兄様の従者はボウロロープ侯爵の派閥の貴族の子息だし、女官長はブルムラシュー侯爵の……叔母だか何だかで伯爵婦人とかじゃなかったっけ。侍女の中には中位や下位貴族の行儀見習いの子もいるけど。

あ、ちなみにザナツク兄様には、まだ決まった従者はいない。というより、従者として送ってくる貴族がないんだよ……年齢考えればそろそろ従者を持つ年齢なのに。

世継ぎとして、期待されてないんだろうね。この辺が本当にかわいそうになるところだったりする。

顔立ちは良いんだから、まずは見た目からと痩せればいいだけなのにと私は思うわけで。

そんな貴族だらけの中だから平民であるブレインは、料理とか洗濯なんかの一部の使用人と同じように通いで登城してる。

今のところ城内での私の護衛は近衛兵がしているし、それで間に合ってしまうので、私がもう少し大きくなったら、あちこち出かけたいから、その時に護衛してもらおうつもりでいる。

そんなわけで、彼は基本的に城の訓練場で、他の騎士や兵士と共に訓練する毎日。

複数を相手にすることも多いらしくて、本当に対人戦の経験を否が応にも積んでるらしい。

一つ不満があるとすれば……その訓練場、バルブロ兄様も使ってるから、度々私が顔を出すので無駄に絡まれるようになったことだろうか。

我が兄ながら面倒くさい……平民がそんなにだめか、兄よ。

まだ矯正が効く年齢だし、絶望的な挫折を味合わせるべきだろうかと思う。

ブレインに何かあったときに困るので、刀を用意した際に私は手持ちのアクセサリーからリボンを組紐の材料にして下緒刀さげおの鞘さについている紐（組紐）のこと。機能については諸説あり。として作り変えておいた物と紋章入りのブローチを下賜した。いざつてときは、笠かさに“処理”しろって意味で。

組紐というよりミサンガ的な編み方してしまったけど、材料が材料だし、三才児が頑張つて作ったんだからちよつと残念な出来なのは許してほしい。



さて、部下が出来たと喜ぶ私だけど、ついに（？）他の貴族の子女と交流する機会が来た。

『はじめてのおともだち』と言うやつである。

……うーん、いつも思うんだけど王族って早くから婚約者とか決められるもんじゃないの？ 婚約者候補と顔合わせもできるのかと思っただけど？

私が婚約破棄物や悪役令嬢物読みすぎてたんだらうか。ちよつと腑に落ちないけど、異世界は異世界。こういう世界もあるのだから。

そういえば、以前『帝国に輿入れして逃げよう計画』のためにちよこつと帝国のことを調べてみた（周辺国に発表してる程度）けど、第四王子のジルクニフ王子か第五王子のアベンカイル王子辺りが年回りの良さそう。それ以外は私とはちよつと年が離れてるし。

確か第四王子は、皇后の子だから、第四王子が皇帝になるのかな？

えー、皇后はパスしたい……。

だとすると第五王子がいいのかなあ。でも、第五王子は第四王子ほど美少年じゃないと聞くし……悩ましい。

まあ、皇帝はまだまだ若いし、もう少し保留。そのうち、帝国に行けることとかあるかもしれないので実物見てから考えよう。

今は『おともだち』が重要よね。

今回は私の母の第二妃も一緒なので、うっかりしたことは出来ないので、オリジナルちゃんが覚えているはずのテーブルマナーをしつかり思い出す。

乳母に抱かれながら、母の後ろをゆっくりついていくと、やがて王宮の庭園に出た。

庭園の東屋のガーデンテーブルには、白いテーブルクロスが引かれ、その上にカラフルな菓子の乗った三段のケーキスタンドが置かれているのが、遠目からもわかる。

テーブルには、すでに何組かの貴族の親子が座っていて、私達が来るのを待っていたらしい。

そして、私は今生にて一番の親友となるラキユース・アルベイン・フィル本来、書籍版なら、デイル web版ならフィアが正しい・アインドラと出会うことになった。

幼馴染

「お茶会なんてめんどくさい……」

ロ・レンテ城に向かう馬車の中で、王都リ・エステイーゼの風景を見ながら、幼女はそう不満を漏らした。

彼女の名前はラキユース・アルベイン・フィル・アインドラ。年齢は五歳、なめらかな金髪を肩で切りそろえ、青いバラの髪飾りと淡い黄色のドレスがよく似合う。ふてくされた表情でなければ可愛らしい幼女である彼女は、王国貴族であるアインドラ伯爵家の令嬢だった。

「ラキユース……第二妃様——マリアーネ様お声がけのお茶会なの。我が家は断れないのよ？」

頬に手をやり、困ったように首を傾げて微笑む母に幼女……ラキユースは、ちらりと母を見上げ、それでも不満なものは不満なのだと、不機嫌全開だった。

「だって、今日はアズス叔父さまが来るって約束していた日なのよ？」

冒険のお話とか、お土産すつごく楽しみにしてたのに」

ラキユースは冒険者である叔父であるアズスが大好きだった。

貴重な魔導鎧の持ち主であり、貴族の称号を捨ててまで冒険者になった叔父。

時折、気まぐれに生家であるアインドラ家に帰り、当主である長兄を筆頭にそれを支える他の兄弟や引退した両親に会い、それまでの出来事を話して、各地からの珍しい土産を置き、またふらりと旅に出る。「アズスは今回は、何日か滞在するって言っていたわよ。だから、帰ってからお話を聞けばいいでしょう？」

貴族の令嬢であるラキユースに良い影響を与えないと、家族はあまり良い顔をしていないのだが、叔父であるアズスは全くそんなことを気にしてはいない。

いつも戻ってくればラキユースを抱き上げてかわいがってくれ、聞いたこともないような、人に仇為す怪物との戦いや依頼で行った遺跡

探索などの話をしてくれる。それは本で読む英雄譚のようで、そんな叔父にラクユースが憧れを抱くのも仕方ないことだった。

「それに、今日のお茶会は、末姫のラナー様のお友達を探すのが目的なんですって」

このお茶会は、第三王女であるラナーのいわゆる幼馴染として接する相手を選ぶお茶会なのである。

本来であれば乳母の子供は乳兄弟として幼馴染であり、婚約者候補や従者として育てられるもののだが、母である第二妃のマリアーネの意向によりそれは遠ざけられた。

第二妃は次期王位継承後を見据えて、ラナーを近隣国……おそらくは、帝国を想定とした政略結婚の駒とすることを計画しており、幼馴染の乳兄弟などという邪魔になりそうなものは排除したのである。

第二妃の実家はブルムラシユー侯爵家だ。だが、正確には侯爵家の派閥の貴族の娘、つまり養女であった。そのため、侯爵家に利をもたらさねばならず、監視がわりの女官長が王城でも目を光らせており、世継ぎを設けたと言うのに実家からの扱いは余り良くなかった。そして、城では正妃を差し置いて、一番美しい庭のある華宮と呼ばれる美しい宮を宛てがわれてはいるものの、財政難の王家では過剰な贅沢はできない。

それ故、自分の価値を確実にする政略結婚の駒として、ラナーの周囲を固める人間は厳選されていたのである。

「えっ……末姫のラナーさま？ 第二王子のザナツクさまじゃないの？」

ラクユースが思い出すのは数ヶ月前に王城で行われたお茶会のこと。

第二王子の顔見せという名の婚約者や従者探しの大規模なお茶会があったのだが、体調不良や急病と称して来ない者が多く、更には肝心の第二王子が、『王子様』と言う存在に素敵な夢を見ていた彼女を非情な現実突き落とした残念王子だったという物悲しい結果で終わったものだった。

「ラクユースより二歳年下のとても綺麗なお姫様よ。初めてお会いす

ることになるわね。色々な本とお勉強がお好きな御方よ。英雄譚や冒険譚が好きなラキユースともきつと話が合うわ」

「ほんと?」

優しく微笑む母の言葉にラキユースは喜んだが、一方でどうしても、あの期待はずれな王子の件が頭をよぎる。

「そうね。ちよつと変わった…趣味をお持ちだけど、剣術や魔法にも興味があるそうだし、ラキユースなら話の内容に困らないでしょうね」

ラナーが最近、平民を一人、直属の部下にしたという話は王宮そして貴族内には広まっていた。

貴族の中には平民を奴隷として飼う者も中にはいる。そのため、ラナーは変わった趣味で——戦える者——毛色の違うペットを飼っているという感覚で見てる者もいたのだ。

ラナーの“部下”と“それ”は根本的に違うし、良識がある貴族は理解しているのだが…肝心のラナーの母である第二妃や兄である第一王子などは前者であった。

一方、良識的なラキユースの母は、そんな余計な噂を幼い我が子に教えるのも憚られ、曖昧な表現にした。

「ふーん…それなら、仲良くなれるかしら」

そんな話をするうちに、王城の城門が見え始めた。

城内についても華宮まではそれなりに距離があり、歩いて移動しなくてはならないが、来るまでのように嫌とはラキユースは思わなかった。なぜなら、彼女の興味は『綺麗だけど、ちよつと変わったお姫さま』という、ラナー姫のことに移ったから。

とはいえ、以前のこともある。だから、子供ながらに(…でも。あまり、期待はしないほうが良いよね)とラキユースは心の中でつぶやいた。



第二妃のマリアーネはとても美しい。王国でも有数の大富豪であるブルムラシュー侯爵家とその美貌を政略婚目的で利用するために養女にするほどなので、三人の子を産み、三十路も半ばを過ぎた今でも若い頃と変わらず、華やかな容姿をしている。

輿入れしたばかりの頃は権力と実家のために正妃の座を狙ってはいたものの、無事に王子を生んだ後は、公務を考えれば面倒なことばかりで正妃になることに旨味を感じず、それならばと第二妃として王に愛でられ、面倒なコトは全て正妃に任せ、自分は美味しい所をつまみ、実家に利益を……そんな生活に変わり現在に至っていた。

「よいですか、ラナー。今日のお茶会は貴女の友人として相應しい貴族の令嬢を呼んであります。よく考えて、選びなさい」

第二妃は侍女と女官を引き連れ、コツコツとヒールの音を響かせてゆつくりと歩きながら、少し後ろを歩く乳母に抱かれて移動する我が子にそう声をかける。

「——貴女の趣味については、もう何も言いません。ですが、立場は弁えなさい。よろしいですね？」

「はい、お母さま。わかつておりますわ」

大人しい返事に満足したのか小さく頷くと、その後は特に言葉を交わすことなく庭に出た。

手入れの行き届いた華宮の庭には美しい花が咲き、茶会を行う噴水の側の東屋のガーデンテーブルには、いくつものケーキスタンドが置かれ、色とりどりの菓子が並べられている。

そして、少し離れた所に全く同じようにセッティングされた小さめのテーブルセットがあり、幼い令嬢達がそれぞれ楽しそうに交流しているように見える。

第二妃が主催では有るが一番高位ということもあり、この場に現れたのは最後であった。そのため、婦人達は爵位が高位の者から次々と挨拶をしてみた。

「よく来てくれました。今日は楽しんでいって下さると嬉しいわ」
微笑みを浮かべ、皆に座るように第二妃が促すと婦人達は席に着く。

「ラナー、あちらのテーブルの御令嬢たちとお話してきなさい」

「はい、お母さま。皆様、失礼いたしますね」

母達に向けてラナーは、幼い小さな身体でカーテシーをすると、子供達のテーブルへと向かった。

さて、お茶会に保護者に連れられてきた貴族の令嬢と言っても、精々五歳から七歳程度の子供である。

将来に夢を見ていたり、身近な大人の真似や、意味はわからなくとも大人びた言葉遣いをしたくなる年頃だ。

「……まあ！ あなた冒険者になって、なりたいんですの？ あんな下賤のモノになりたいだなんて」

「そうですね。剣まで習うなんて……！」

「戦うことなんて、護衛や殿方に任せればよろしいじゃありませんの」
ラナーがテーブルに近づくと、青いバラの髪飾りと淡い黄色のドレスが印象的な幼女……ラキユースが他の参加者数名に囲まれて、涙目になっている。どう見ても嫌味を言われている状況だった。

一瞬で状況を把握した彼女は、白けた目で囲む令嬢達を見る。

すぐにテーブル付きの給仕の侍女が慌てて、ラナー姫の事を令嬢達に説明しようとするが、それを彼女は手で制し、

「……これは、どういう状況でしょう？」

芝居がかったように眩き、可愛らしく小首をかしげた。

「どなたです？ お茶会に遅れていらつしやるなんて」

突然現れた繊細な美しい人形のような幼女の不思議そうな声に、一番年嵩の少女……声高にラキユースにマウントを取っていた……が、こちらを見てにらんでくる。周囲の取巻き化していた令嬢も同様だ。

そして、テーブル付きの給仕の侍女は、主人に制されているため、何もできず顔色悪く状況を見守るしかない。

「ああ、確かに挨拶が遅れましたわね。私はラナー・ティエール・シャルドロロン・ライツ・ヴァイセルフ。そう、ヴァイセルフ王家の第三王

女ですわね」

「そういえば、今日は王女の証にもなっている冠の髪飾りはつけていなかったなとラナーは思いつつ、微笑みを浮かべたまま名乗り、スツと真顔になる。

「それで、どういう状況でしょうかと聞いているのです。少なくとも、和やかにお話という訳ではありませんのでしょぅ？」

幼女が第三王女だとわかった令嬢達は全員が慌てて礼を取るものの、ラナーの表情は戻らない。

そして名前を名乗り、事情を説明をしようとする少女に更に残酷な言葉を告げた。

「ああ、結構よ。あなたの名前は、聞くつもりも覚えるつもりもないわ」

周囲の取巻きも一瞥し、同様に名前を聞くつもりはないとラナーは言う。

「このお嬢様方は、気分が悪いので控室の方でお休みになられるですよ。お母様にも同じように伝えて頂戴」

テーブル付きの侍女に指示し、控えている侍女を呼ばせた。そして、取巻きともども、こちらに向けて騒ぎ立てる少女達を排除したのである。

残るのは、あつけにとられているラキユースのみ。

「さて。どうしてあなたは、あの方たちに囲まれていたのかしら」

口籠りながら言葉にする説明によれば、談話するうちに将来の夢の話になったらしい。

素敵な貴公子との結婚を夢見る少女が多い中、ラキユースは誰かを助ける英雄になるために冒険者になりたいと言ったらしい。そのため剣を習っていることや体を鍛えていることなどを語ると、先程のようにバカにされたと悔しそうにしていた。

「冒険者……ですか。確かに王国では英雄と呼ばれるためには、それしか方法はありませんものね……」

眉をしかめ、悲しそうにラナーは顔を伏せた。

「隣国であるバルルス帝国や聖王国では、女でも文官や騎士になれま

す。でも、王国は女ではなれない。だから、冒険者しか方法がない」
王国では女は騎士にも文官にもなれない。ただ、政略結婚用の駒としか生きる道がないのである。それ故、戦うすべや政を習う貴族の令嬢などほほいない。

王国で英雄になるならば、唯一、性差がない冒険者だけが夢を掴むための道にすら思える。

「確かに、この国ではあなたの夢はおかしいかもしれない。けれど、私は素晴らしいと思います」

そう言い切り、輝くような微笑みを浮かべてラナーは手を差し出す。

「あなたのお名前、聞かせていただけませんか？ おともだちになりましょう」

こうして、ラキユースは自分の夢を応援してくれる親友を手に入れた。

「やあ、脳内の友人たち……って、そろそろ、本当の”おともだち”もできたし、イマジナリーフレンドは卒業したいところだけど、呼びかけしやすいからこのままでもいいかしら。」

友達になったラキュースは、伯爵令嬢だけど冒険者……いや、英雄になりたいという変わった子だったの。

王国だとたえ貴族でも、女に生まれちゃうと冒険者になるしか英雄になる方法がないんだよねえ。他の国では目指すこともできる文官にも騎士にもなれないから、それで英雄なんて目指せないし。

なんで、この国は自分で自分の首絞めてるんだろう？ 女でも優秀な人間は多いと思うんだけど。

ところで、異世界転生のテンプレで身分を隠して冒険者登録、そしてひっそりお金稼ぎと俺TUEEEみたいなルートがあるけど、この世界での冒険者はモンスター専用の傭兵みたいな立ち位置なんだよね。

ちょっとだけ憧れもあって冒険者について調べた時にそれを知った。一番近いのはファンタジー系のTRPGの冒険者と言う名の何でも屋かな。少なくとも、ラノベのテンプレ冒険者とは違う感じ。

それなら、冒険者が安定してお金が稼げる仕組み作ったほうが良いのかなあとあって、冒険者組合にお金を落とすために「モンスター討伐による報奨金制度について」の枠組みとその効果のプレゼン資料を作ってお父様に見てもらおうことにした。

——うん、大して反対意見もなく、採用されたらしい。

ええ、本当に貴族達に反対とかされなかったの？

普通に通っちゃった……反対意見がなかったことにびっくり。

根回しみたいなの今の私にできるわけないし、どうせ通らないんだろうなって思ってたのに。

どうも私の化粧領本来の文字と意味は、化粧料であり中世の相続権

のなかった女性に唯一許された生前に相続した財産のこと。転じて、化粧領とは身分の高い女性が生まれた際に親から割譲された土地や領のこと。将来結婚する際に持参金としたり、生活費の足しにしたりする個人資産であるからの税収の一部が報奨金にされることが同時に決まっていたらしい。

なるほど？ 言い出しつpegが私だから、私の資産でなんとかしろってことで採用されたのか。

私が帝国に輿入れしたらどうするんだろう……そこまで考えてないのかな。まあ、いいけど。

ちなみに、プレゼン資料は幼女（もうすぐ四歳）が作ってきたとは思えないほど、堅実にまとまったものだったから渡された父王だいぶ面食らったみたいです。特に手直ししないで、会議に提出されたらしい。前世の仕事（時々やってた営業事務）が役に立ったと思ってる。



さて、折角おともだちも出来たので、今日はおでかけです。

アインドラ家に遊びに行くと先触れを出して、馬車を出してもらいました。

で、現在地は王都近くの街道ござる。

もちろん、途中でちゃんとアインドラ家でラクユースを拾ってます。

同行者はブレインとラクユース、そして馬車の御者とアインドラ家から連れてきた護衛（馬に乗って外にいる）が二人。

さつきから、どこに行くのかとラクユースとブレインがうるさいけど、目的地は”ここ”なのよ。

馬車が急に止まる。

王家の馬車だから、内装は割と良い物なので急ブレーキでぶつかっ

でもそこまで痛くない。

外の護衛達が馬車の外に絶対に出ないで下さいと叫んでいて、ブレインが刀の柄に手をかけ外を睨んでいる。

どうやら、目的のモノが現れたらしい。

最近、王都近くの街道で強盗被害が増えた。

護衛が少ない馬車や商人が狙われるのだが、奪われるものが金銭と魔術書のみで、その場には商品や品物が残されているのだ。

もちろん、襲われた者はだいたい死んでいる。奴隷として売れば高い値段がつくような女性すら殺されている。その死亡状況も焼かれたものばかりで、剣などで切られたあともない。

運よく生き残れた者が残した言葉から、襲っているのはボロボロの黒いローブを纏った魔術師らしい。

討伐隊が組まれたりしているけれど、なかなか足取りが掴めなくて王都の冒険者組合も困ってるみたい。

この話を聞いたときは、食い詰めた魔術師が強盗という手段を取ったのだろうかと最初は思ったのよ。

王国だと、魔法使いの地位が低いからね……

先の女性の地位とかさ、この状況詰んでるのに、なんで誰も気がつかないの……？

いやまあ、それはそれとして。

金銭と魔術書のみが目的の強盗とか、いくら魔術師にしたって、おかしいじゃない？

残された品物の中には高く売れるマジックアイテムや武器、ポーションの類、更には宝石のアクセサリーとかもあつたのに全く手を出されていない。

なのに、金銭と魔術書はきれいに無くなっている。

これはもしかして、魔法を覚えるために魔術書が欲しくて、魔術書を買うために金銭を強盗しているのではと。

他の換金アイテムに手を出さないのも、その価値がわからないから。

つまり、人とはかけ離れた価値観で動いている。

ということとは、この魔術師は人間ではない……？

と思いだったわけである。

今のままでは、討伐されるのは時間の問題だし、魔法の教授と魔術書の手配でこの人外（仮）の魔術師が部下になってくれないかなあと思いつき、私は今回の行動に至った。

まあ、失敗しても最近手に入れた神刀もどきを持っているブレインには敵わないはず……期待してるぞ、ブレイン。

ラキユースを巻き込んだのは、私が外出する大義名分が欲しかったのだ。

一応反省はしているが、後悔はしていない。

さあ、とりあえず交渉しましょうか、人外（仮）魔術師さんや。

知情意

「——ねえ、魔術師さん。こんな方法は無駄の極みですわよ？」
今、彼は不死の魔術師として生まれて二度目の困惑を感じていた。
一度目は、あの商人との出会いであるが、あの時以上に困惑している。

人の精神活動の根本である、知性、感情、意志。
知情意とはそういう意味である。

人とは、頭を使って考えることができ、理性と感情があり、確かな自己の意思を持つ者。

……と言うならば、考えることができ、多少なれど感情があり、意思を持つ人型のモンスターはどう分類されるのだろうか。

ここにいるのは、一体の不死リッの魔術師チという不死者アンデッドモンスター。
不死の魔術師は骸骨スケルトンの魔術師メイジの上位種であり、不死の魔術師の上にはエルダーリッチの大魔術師がある。その更にも恐ろしい化物が存在するのだが、人の世に知られているのは不死の大魔術師までだ。

不死者は生者を憎む。

生者から溢れる生きるためのエネルギーが原因なのか、それはわからないが、不死者とは生者を憎み、破壊と殺害衝動という、本能のみで突き動かされるモンスターなのである。そこに知性はなく、理性もなく、意思もない。

だから、不死者に知情意とは一番遠い言葉だろう。

……であるのだが、この不死の魔術師は違った。

元は行き倒れた魔術師だったのかもしれないが、彼もしくは彼女は彼女……にその記憶はない。だが、己が不死の魔術師だと認識できた時に

は、己が知らぬ魔法を知りたい、学びたいという強い願いを持っていた。

しかし、人であった頃の記憶を無くした不死の魔術師にその願いを叶える術はなく、ただただ本能のままに生者を殺す日々。

それが変わったのは偶然襲った一団が実は盗賊達で、逆に襲われていた商人に感謝されてしまったことが発端である。

その商人はお礼として金銭と魔術書、魔法書を差し出してきたのだ。おそらく、不死の魔術師とわからず、食い詰めた魔術師だとも思っただろう。

その商人と……おそらく、生まれて初めてまともに会話を交わした不死の魔術師は、魔術書や魔法書によって魔法を覚えることができる^{と知った}。そして、それら書籍は金銭で購入できるということも。

生者に対する不快感や殺意を理性で押し殺し、貰った金銭と書籍の対価としてその商人を見逃し……商人からすれば、世間知らずで偏屈な魔術師と朝になって別れたただけだろうが……不死の魔術師は、自分の望みを叶える方法を知った。

それから、この不死の魔術師はこの商人の名前“デイベー・ノグ”から“デイベーノック”と名乗るようになった。

街道で商人や馬車を襲い、金銭と魔術書を奪い、その近くの街で魔術書を買う。

金の稼ぎ方などわからないのだから、盗みしか方法がないのは、仕方ないといえば仕方ない。

街に侵入する際には、不死の魔術師とバレないように盗んだ仮面と指先まで覆う籠ガントレット手を身に付け、不死者が当たり前に持つ生者に対する不快感や、破壊と殺害衝動の本能を理性で抑える。

ひとところにいれば、すぐに討伐隊が組まれるため、ある程度の期間で別の場所に移動することも忘れない。

人とは、頭を使って考えることができ、理性と感情があり、確かな自己の意思を持つ者——この定義であるなら、デイベーノックは悪人ではあるが、人であると言えた。

そうやって、彼は王都近くの街道まで流れて来た。

いつもならば、日が落ちてから行動するのだが、今日は曇天の曇り空。暗くなるのが早い。

そのため、普段よりも早い時間であつたが人気ひとけがなくなつた街道を、ゆつくりと進む護衛の少ない豪華な馬車を見つけ、襲いかかった。得意の魔法である《火ファイヤーボール 球》は着弾する前に馬車が止まり、その上、馬車や馬具等の装備品自体が難燃性でできているのか多少の魔法ではびくともしない。馬車を引いている馬もよく調教されているのか、近くで爆発があつたというのに制御不能にはならず、御者の手で大人しくしている。

しかし、魔法で”足”を止められたのは間違いないので、デイバーノックは連続して《火ファイヤーボール 球》を撃とうとするが、護衛が優秀なのか弓を射掛けられ魔法詠唱を止められる。

やがて、護衛が必死に止めているにも関わらず、馬車の扉が開き、中から豪華な服をまとつた女の子が現れ……冒頭の言葉を述べて周囲を見回したのだ。恐らく、デイバーノックが魔法の届く範囲にいるのはわかつているものの、どこにいいのかまではわからないためだろう。

「ラナー姫、お前本当に何やってんですか!?! 危ないから、馬車の中にいろつて言つてんだらうがっ!!」

「うう……ラナーさまあ……!?!」

そして彼女が出てきた馬車の中から外にいる護衛達よりも少し若い男が細い剣を片手に子供の手を慌てて引き、その馬車の中では外に出てきた子供……ラナーより、少し年嵩の子供が盛大に号泣している。

もちろん、外にいる護衛ですら非常識な行動をしているラナーにドン引きしている様子だった。

「何つて……今襲撃してきた魔術師さんと交渉するんですよ? きつと、人間ではないでしょうけど、話は通じる相手でしょうから。」

ほら、ブレイン手を離して下さい、とポンポンと掴まれた手を軽く

叩き、彼女は襲撃者の反応を待つ。

ブレインと呼ばれた若い男も、諦めたようにラナーの隣に立った。今、デイバーノックは不死の魔術師として生まれて二度目の困惑を感じていた。

一度目は、あの商人ディーバーとの出会いであるが、あの時以上に困惑している。

「ねえ、魔術師さん、新しい魔法を覚えたいのではありませんか？ そのために人を襲っていることはわかっていますわ。それが無駄の極みだと申ししておりますの」

交渉したいと伝える上に、自分の行動原理を知られている。本当にデイバーノックは困惑していた。

「そちらが攻撃行動を取らない限り、こちらもあなたを捕らえたり、攻撃はしませんわ。ですから、私とお話しましょう？」

とりあえず、姿を奴等に見られるのはまずいだろう……とデイバーノックは思う。

ひとまず姿を隠したまま、彼はこのラナーと会話をしてみることにした。

「……………何故、目的と……………人間ではないとわかった……………？」

デイバーノックの声は暗く、背筋が凍り付きそうなほど虚ろに響く。

「っ！ 反応がっ！ やりましたわ……………！」

ラナーは無邪気そうに反応があったことに喜び、対象的に彼女以外の同行者、護衛達や御者はかわいそうなほど、顔色を青ざめさせている。

「えと、簡単ですよ？ 強盗で金銭と魔術書類しか盗まれない。現場には、もつと価値が高い品物が残されている。つまり、人間とは違う価値観を持つものが襲っているとしたか考えられませんもの。この私でも気がついたくらいですし、もう少ししたら冒険者による本格的なモンスター討伐隊が組まれていたと思います」

実際、残した手がかりは大きい。多少頭の働く者であれば、モンスターの仕業とすぐにわかっただろう。

だが、それを年端もいかない……そう、もうすぐ四歳とはいえ、未だ三歳という幼女、ラナーが気がついたことがおかしいのだが、残念なことここにそれを突っ込む者はいない。

「だから、その前にあなたを勧誘に来ましたの！ 私の下で魔法を研究しませんか？ 私の部下として契約して力を振るって……多少のお約束を守っていただけのならば、魔法の教授してくれる人材の紹介とあなたが欲しい魔術書の手配をしますわ！」

ラナーは渾身の勧誘に満足そうだが、聞いていた他の者——デイバーノックすら含めて——開いた口が塞がらないとはこの事だろう。「それは……本気で言っているのか？」

「もちろん、本気ですわ。私は、この国……リ・エステイーズ王国の第三王女、ラナー・テイエル・シャルドロン・ライツ・ヴァイセルフ。最高権力者の娘として、この名にかけて、約束を違えるつもりはありません」

デイバーノックがもう少し長く生きて……不死者に生きてと言うのもおかしい話だが、もう少し人と関わり、言葉の裏や態度について疑うことを知っていたら、こんな杜撰な勧誘などに引っ掛かりはしなかっただろう。

だが、残念なことに彼は不死の魔術師として生まれ……いや、生まれ変わってから、さほど時間が経っていなかった。そのためか、契約の内容に、言葉に惹かれてしまった。

「……その言葉に嘘はないのだろうか」

だから、彼はその姿をラナーの前に現した。

街に行くときと同じように、顔を覆う仮面と指先まで覆う籠手も身に着けている。

「ねえ、魔術師さん、あなたのお名前を教えてくださいら？」

自分を守ろうとする護衛達やブレインを手で制し、ラナーはデイバーノックに微笑む。

「……………デイバーノック」

「では、デイバー。私の部下になるのであれば、まず絶対に守っていただきたいことがあります。それは、人を不用意に殺さない、襲ったり

しないということ。もちろん、自衛はするなと言うことではありませんけれど」

「デイバーノックは、少し考え……やがて頷いた。

「さて、細かいことも相談しないといけませんから、馬車の中で話しましょうか。ブレイン、ラキユース行きますわよ」

そして、馬車の中にデイバーノックも招き入れ、ブレインの隣に座らせる。

号泣していた子供……ラキユースはあまりの出来事に泣きつかれ、放心していた。

「ああ、それから。今回のことは他言無用ですよ、あなたたち」

外にいる護衛達と御者についてはいけない話に、顔色は青を通り越して完全に白くなっており、ラナー姫の指示をただ黙って聞くほかない。

「それでは、帰りましょう」

馬車の中から、いい笑顔の幼女ラナーが外に呼びかけ、馬車は走る。

「……もう、やだ……帰りたい、お父さま、アズス叔父さまあ……」

ただ一人、巻き込まれた幼女ラキユースに特大のトラウマを植え付けながら。

前世？ の記憶が戻ってから、本当に色々あったけれど、私は四歳になった。

ブレインとデイバーノックを部下として迎えたり、ラキユースと友人関係になったり。

あ、ちなみにデイバーノックの魔法研究所は、ブレインに与えた家の地下にある。

元は大きな商家だったらしく、奉公人のための部屋も多く、地下に大きな倉庫があったのだ。

前にも言ったけど、服飾品や化粧品類を開発と販売する自分の商会を持ちたいんだよね。

その時に、この家を店として利用できたらいいなあと思って、確保していたのだ。

他にもやりたいことがあるし、もっと人手が欲しいなあ。

でも、なかなかない。

良さそうだと思うてもどこかの貴族の紐付きだったりして難しい。

んー……どこかの商会を買収するか、一から商会を立ち上げるか。時間だけはまだあるから、動けるうちにやれることはやっておかないと。

一応、公的な仕事（いわゆる公務）や貴族達にお披露目するのは五歳になってからだと母や乳母からは聞いている。

だから、相変わらず公務らしい公務はなく、それなりに姫として恥ずかしくないマナーや、淑女の嗜みと言われる刺繍なんかのお勉強をして、ラキユースの家に遊びに行ったり、来てもらったり、図書館に籠もったりしてる。

ああ、それで私の四歳のお祝いと称して、すでに嫁いだ腹違いの姉二人も、お祝いの品を持ってきてくれたの。

レナーテお姉様元第一王女は、フリルとレースいっぱいフリッフ

リのドレスをちよつとしたデザインと色違い（ローズピンク、パールピンク、ルビーピンク）で三着。サイズはどこで調べたのか、もう少し大きくなっても着れる大きめな物だった。

お姉様の旦那様のペスパア侯も一緒に来ていたので、初めて会ったけど、すっごいイケメン。

正直、バルブロお兄様より年上なのに逆に年下に見えるし、めっちゃめっちゃ整った凛々しい王子様顔。

え。レナーテお姉様、実はすごい勝ち組……？

サーナお姉様第二王女は、レナーテお姉様と合わせたのか、同じデザインに頼んだと思われる靴と手袋、そしてヘッドドレスのセツトを同様に三点。

残念なことに、旦那様は忙しくていらっしやらなかった。

貰ったものに文句を言うのはアレだけど、どっちも良い品だと思うし、確かに似合うんだよ？

けど、私は青系の色が好きだから、ピンク系ばかりなのは、正直微妙。

これ、間違いなくレナーテお姉様の好みで選んだんだろうなっていうのがわかる。どうせサイズを調べるなら、好みもわかるだろうに。わからないなら、せめて聞いて欲しかった。貰ったからには着るけどさ……

ごめんね、お姉様達がわざわざ持ってきてくれたのに。

でもね、私は知っているんだ。

私に贈物を持つてくるといふことを大義名分に登城した帰りに、父王に貰ったらしい宝飾品をたくさん持って帰ったのを。

あれ、宝物庫にあったやつよね。

国宝は流石に持つていかなかったみたいだけど、王家の資産は減る一方……本当、お父様もお父様だ。

とはいえ、どうもあの二人に入れ知恵してる主犯は正妃っぽいから、あまり下手なこと言えないんだよねえ……

もう、ほぼ実権は第二妃が握っているけど、名ばかりとはいえ、正妃は正妃。

国母であり、女性貴族の頂点である、『王妃様』だ。

正妃、実家はすでに没落しちやつてるから、第二妃みたいに強力な後ろ盾がない。

そして、第二妃が正妃になりたがらないから、公務をほとんど押し付けられ、住まいとする宮殿さえもあまり良いとは言えない。

いわゆるお飾りで、虐げられている可哀想な妃ってやつ。

こういう状況だと、そのうち第二妃がとんでもないザマアをされそうな気がするのよ、私が悪役令嬢モノの小説を前世に読みすぎたせいだろうか。

正妃はこう言うてはあれだけど……太った上品なマダムと言う言葉がよく似合う人。下品さはないし、痩せれば美人なんだろうなという雰囲気がある。ただ、どうにも見た目では第二妃に劣る。

実子の姉二人が胸が大きくて全体的に華奢っていうより肉感ある……だからといって太ってるわけじゃない。伝わるだろうか、この感じ……いわゆるグラマラス美人で、きつと気をつけないと太り易い体質なんだろうね。

そういえば、ザナツクお兄様って、正妃やお姉様達に似てる。特に目の部分がそっくりだ。

あの体型とか、吊り目がちのハッキリした二重の目とか。

逆にバルブロお兄様は間違いなくお父様の王家の血筋が出てる。

性格が先代王そっくりって話したじゃない？ それだけじゃなく、見た目も瓜二つ。

王子時代の肖像画がほんとによく似てるんだ。国王になってからの肖像画は威厳の為にかアゴヒゲが生えているので、将来は是非ともバルブロお兄様もヒゲを生やしてほしい。

ほんと、あの二人の遺伝子ってどうなってるんだろう。

同腹三兄妹なのに、唯一第二妃お母様そっくりなのが私だけっていうのがホント不思議。

……あれ？

——まさかと思うけれど、ザナツクお兄様の本当の母親って正妃なのでは……？

そう考えると、腑に落ちる点がいくつかある。

まず、実は正妃は第二妃がザナツクお兄様を妊娠していた時期に、同じく妊娠していたのだ。

色々あつて早産になり、結果は死産であつたらしい。そのため、心を病んだ正妃は暫く療養の為に王城から出て、離宮にいた。

そして、ザナツクお兄様が生まれてから、少しして帰ってきた。

この時期、侍従長が自殺するなんていうちよつとした事件があつて、宮殿内の人事がシツチャカメツチャカになっていったんだそう。

ちなみにこの侍従長自殺事件だけど、実は他殺だったみたい。私も魔法に詳しいデイベーに指摘されるまで自殺だと思つていたし。だから、オリジナルちゃんもそう思つてたらしくて、あまり詳しい事がわからない。

あからさまにあやしすぎない？

それでもつて、正妃は第一王子のバルブロお兄様を王太子にすることは反対している。

基本スタンスは「ザナツク殿下がもう少し育つてから様子を見てはいかがですか？」というやんわりとしたものだけど、もうこのスタンスからあやしい。

もしかして、生まれた子供を入れ換えたのでは——？

そう思つたら、背筋が寒くなった。

つまり、これって私の同腹兄は、十中八九処分されてるってことだ。

正妃がどうして、こうしたのは理由はわかる。

正妃は王妃だから、その王妃に男児が生まれたら王位継承権一位はその子供になる。

しかし、彼女の家は没落しているから、後ろ盾にならない。

もちろん、ある程度成長後ならば、旨味を感じて後ろ盾になる貴族も出てくるだろうけど、それ以前に殺されてしまっただけでもどうにも出来ない。

継承権一位の正妃の子供として育つよりも、第二妃の子供として同腹の継承権二位として育てば殺されることはないし、場合によっては王位も転がり込むかもしれない。

ええ……国が二つに割れて、内乱になるかもしれない本当の原因って、コレだったってこと……？

兄妹愛―前編

「……それで、そんな話を俺達にしたわけは？」

魔法の明かりが灯ってはいるものの、仄暗い書庫。

いくつもの書架が並べられ、その中には貴重な魔術書や魔法書が並べられている。元はただの商家の地下倉庫だったものを、この書庫の主がせっせと改造をした結果だ。

部屋の最奥には、地上の館にあつた大きな黒檀の机を運び込んであり、机上にはこの書庫の主が研究しているらしい魔術理論が書き殴られている羊皮紙や、参考にしている書籍が乱雑に置かれていた。

その机の前に座る書庫の主……眼の部分だけが象形的に刻まれた銀色の仮面に黒いローブを纏った男……デイバーノックが、無機質な響きのある声で、そう話を振る。

彼の側には余りこの場にはふさわしくない、華奢で小さなテーブルとスプリングの効いた長椅子があり、その長椅子には子供が二人座っていた。

カタカタと震えながら全てを諦めたような、それでいて何かを悟ったような表情をした蒲公英色のドレスを着た薔薇の髪飾りをつけた少女……ラキュースとパールピンクのドレスを着た人形のように可愛らしい幼女……ラナー。

そして少し離れた壁際には、寄りかかるようにしてこの館の主人である若い男……ブレインが腕を組んで話を静かに聞いている。

「そうですねえ……私一人で抱え込んで、うっかりして……君のように勘のいいガキは嫌いだよ」って始末されないためにかしら」

ラナーは困ったように首を傾げ、答えになっていない答えを呟き、テーブルの上ののったティーセットから、カップを手に取った。

「……もうだめですわおしまいですわ……なんでわたしこんなしらなくてもいいとんでもないひみつしらされてるんですの……もうやだどうしたらいいの……なんでわたしらなーさまとともだちになつたの……たすけておとうさま……おじさま……かみさま……神

さま……………」

ラクユースが首にかけた水神の聖印を握りしめ、堰を切ったように泣きながら、つぶやき続けているのを、ブレインは呆れ半分、同情半分の視線を送る。

（ラナー姫の破天荒ぶりは、もう慣れるしか無いんだが……このお嬢ちゃんも最近じゃ、神にまで祈り捧げるようになってしまったし、世を憐んで神官にでもなりそうな勢いだな）

そんな事を考えながら、ブレインは美味しそうに紅茶を飲んでいるラナー姫をちらりと見てため息を付いた。

「今のところ、決定的証拠はありません。だから、あくまで私の推測と考察の結果だけです。なので、話が出たところで一笑のもとに付されるでしょうね。ただ、今のまま育てば、ザナツクお兄様は正妃様そっくりになることは間違いありませんわ」

カップの中身である紅茶を飲み干し、ほう……とラナーは息を吐く。

微笑みながら王家のとんでもない秘密——第二妃の子であったはずの第二王子のザナツクが、正妃の子であり、もう一人いたはずの王子が処分されているなどという——そんな話を自身の考察を交えて、まるで世間話のように語ったラナー。

まさに、何故そんな話を無関係な自分達にした？ とデイバーノツクではないが、聞きたくなる所業である。その理由が”うっかりで始末されたくないから”という理由になっているようで、なっていないものであるから、なおさらだ。

「とりあえず、私の話はこれくらいですわね。後は……ああ、そういうえぼここに来た理由はこの件ではありませんでしたね。えーと……侵入者があったのでしたっけ？」

「ああ、ブレインが登城してちょうどいかなかった時間に、ここに入り込んだようだ」

魔法で眠らせてある、とデイバーノツクは立ち上がり、部屋を出ると地下室の更に奥へと進んでいく。

地下は倉庫として使用されていただけあり、奥には奴隷用と思われる

る牢があつた。

王国はまだ奴隷制度が色濃く残る国だ。だから、ただの商家にすら奴隷用の牢がある。ある程度の規模の商家には奴隷は働き手として便利であつたからだ。

ラナーとしては、奴隷制度はなるべく廃止に持つていきたいとは思っているものの、根回しの面倒臭さ故に彼女のやりたいことリストの中でも柵上げになつている問題である。

暗い牢屋の中を覗き込んでみると、まだあどけなさの残る十歳前後くらいと思われる少年と……ラキユースと同じ年齢くらいの幼い少女がロープで縛られて壁に背を預けるように寝ている。

ちなみにそのラキユースだが、泣きつかれて書庫で寝ているので、これ以上の心労が無いよう何よりであつた。

「子供……ですか。自衛は許可してはいますが、殺さなかつたのですね」
「なるべく殺すなども言われているし、殺すまでもなかつたからな」

デイバーノックは、そう言いながらこの子供達から奪つたという武器……刃がかけたボロボロの短剣を二本見せた。

ラナーは牢屋の中にいる少年と少女の身なりを確認する。

元は良い物だつたのだろうが、薄汚れてぼろぼろになつた服と靴を身に着けている。

顔はよく見えないが、二人とも投げ出した足に傷や青あざなどが見え、痛々しい。

「元は良家の子供でしょうか……？ あの傷は、取り押さえるときにも……」

「いや？ あれは元々あつたようだが」

「そうですか……と、ラナーはつぶやいて一緒に来ているブレインの袖を引く。

「ブレイン、あの子達を起こしてもらえますか？もしかしたら、まだ武器を持っている可能性があります……」

「へいへい。……珍しく、行動を自重しましたね、ラナー姫。いつものように突っ込んでいっただらどうやって止めようかと思つていました
が」

「ちよつと？ ブレイン、あなた普段の私をどういう目で見てるんですの？」

不機嫌そうなラナーに返事はせず、ブレインは鍵を開けて牢の中に入り、まず少年の方の肩をゆすり起こした。

軽くうめいて目覚めた少年は、一瞬自分の置かれた状況がわからなかったようだが、身動きができないように縛り上げられていることと、すぐ側に一緒に忍び込んできた少女が同様の状態になっていることで、逃れようともがいた。

「クツソ……ルベリナも捕まってるのかよ……！ おい、これ解けよ！ ふぎけんなっ」

イモムシのように身体をくねらせて暴れるが、隣に寝ている少女……ルベリナを起こす結果にしかならなかった。

「……………っ!? 捕まってるじゃん……だから、やめようって言ったでしょ！ 兄ちゃんのせいじゃん……」

「うっさい！ お前だって、賛成してただろ！ 昼間なら、人がいないから大丈夫だって」

起こされたルベリナは、自分の置かれた状況を理解すると諦めの入った声で少年に悪態をついた。

赤毛で毛先に少しクセがある髪質と整った顔……顔がわかるようになるのと、二人が似ていることがわかった。

「ふう……取り越し苦労だったかしら………兄妹喧嘩は、後でしていただけますかしら？」

牢の外から、幼い声——ラナーの声が響いた。

「さて、どうしてここに侵入したのかしら？ それから、あなた方のお名前は？」

「は、誰が言うかよ」

イモムシの姿のまま、少年が凄んだところで全く意味は無い。

大体、妹である少女の名前はすでに、己が口に行っているのだが。

「教えていただければ、無体なことはしませんし、何か食事も持ってきてますよっ？」

「そ、そんなもんで釣られねえよ」

ぐううーと腹の鳴る音がするが、少年は頑として口を開こうとはしない。

だが、もう一人の少女は違った。

「食事……食べ物……!? えと、このお屋敷、昼間は人がいないので盗みに入りやすいかなあつて侵入しました！ 私はルベリナ・ボルジア……兄ちゃんの名前はマルムヴィスト・ボルジアっていいいますー！」

「あ、おい、ルベリナ!？」

あつさりとラナーの言葉にノリノリで答えるルベリナに真っ青になるマルムヴィストだった。

侵入者である自称ボルジア兄妹に、食事——といっても硬い黒パンと干し肉、そして林檎みたいな果実と胡桃、それから水という簡素なものだけ——を与えた。元々は、ブレインが常備していたものだし、後で埋め合わせをする約束にはなってる。

数日前から、盗みがうまくいかなくて何も食べていなかったそうで、余程飢えていたのか二人は争うように取り合いながら食べていた。

私の身分と名前は明かしたものの、幸いデイベーノックは私との約束を守って、研究室であろうとどこでも常に仮面と籠手を身に付け、全身を隠すような黒いローブと云ういつものアヤシイ魔術師スタイルでいるため、彼がモンスターである不死の魔術師であることはバレていない。

だから、特に何も盗まれていないし、嚴重注意の上、口止めをして兄妹を放免しても良いんだけど……

それにしても、ボルジア……ボルジアかあ。

ボルジアと聞いて前世歴史好きの私が真っ先に思い出すのは、ルネサンス期にイタリアで栄華を極めた貴族、スペインのバレンシア地方を発祥とするボルジア家のこと。

簡単に要約すると”愛と欲望の教皇一族”だ。

多分、この家を詳しく知らなくても、教皇の『アレクサンデル六世』とか、『チェザーレ・ボルジア』っていう枢機卿の名前や、この家の秘薬である毒薬『カンタレラ』と言う名前を知ってる人は多いはず。

アレクサンデル六世は世俗的に墮落した教皇の代表的存在で、カトリックの司祭（神父）は神に一生使えるため、妻帯しないという教え現在もローマ教会の西方典禮様式では結婚できないが、東方典禮様式では結婚できるがあるにも関わらず、本来ならいないはずの實の息子のチェザーレや娘のルクレッツィアを使って、一族の繁栄に精力を注いだ。そして、その息子と娘の近親相姦疑惑や、婚姻と暗殺による財産の搾取、独自の毒薬による暗殺など、ボルジアの名前は好色さ、強欲

さ、残忍さ、冷酷さなどを代表するものになったのだ。

で、話は変わって、こつちのボルジア家の話だけ……。

一応、男爵という地位を持ち、名ばかりの貴族ではあったものの薬
といえど『ボルジア商会』と言われるくらい有名な薬品商だった。

まあ、裏では犯罪組織との繋がりもあるとか色々言われていたんだ
けど、腕の良い薬師とか錬金術師達が複数所属していたみたいで繁盛
していたのだ。

でも、三年くらい前に突然、このボルジア商会は商會長一家惨殺と
いう事件により潰れた。

その理由については繋がってた組織に潰されたとか、位の高い貴族
に目をつけられて暗殺されたとか、商売敵の商会に陥れられたとか、
その手の種類には困らないレベルで噂されていた。

ただ、一家惨殺といっても屋敷にあった死体は會長と息子夫婦のみ
で、息子夫婦の子供達……幼い兄妹だったらしい……の姿はなかった
らしく、傍系である親戚筋の家が手を尽くして探したそう。それで
も結局、一向に見つからず、ボルジア家の莫大な財産や男爵位は
その親戚筋の家が継いだ。

……というのが、私の中にあるこの世界でのボルジア家について知
ることだ。

今でもボルジア商会のことは時々噂にはなるけれど、貴族ではあつ
たけれど、ほぼ名ばかりで裕福な平民に近い暮らしをしていた彼等につ
いて私は知ってることは少ない。

ちなみにブレインは、このボルジア商会の惨殺事件を知っていたら
しく、子供達が名乗ったときにまさかかっていう顔をしていた。

うーん、これどうしたらいいんだろう。

この子達、名乗った通りだとしたら、行方不明だった兄妹つてこと
でしょう？

偽名……？ という考えもよぎるけれど、あの惨劇から逃れ……も
しくは、連れ去られた先から逃れ……頼れる者もなく三年を過ごした
のだとしたら、目端の利く子供達だ。

とりあえず、牢から解放はまだできないけれど名乗ってくれた妹の

方……ルベリナの方に声をかけ、私は話を聞いてみることにした。



——まず、結論から。

二人はボルジア男爵家の兄妹で間違いなさそう。

彼等は、惨殺事件の犯人を見ていた。

私は思わず頭痛がする頭を抱えた。

うん、大体予測できると思うけれど、首謀者は資産や男爵位を継いだ例の傍系の親戚筋の家の当主だった。

更にボルジア家は薬品商は表の顔で、実は暗殺者だということまで判明した。

とはいえ、直系だけがそれを知る形になっていたらしく、ボルジアの名を持たない傍系は裏の顔までは知らないそうで……襲撃された際は多勢に無勢で、兄妹の両親や祖父は二人を逃がすために、犠牲になったのだとか。

一応、兄妹はそれなりに鍛えられていたから、暗殺は腕力的にまだ難しいとしても、追手を撒きながら、その優れた身体能力で盗みを働いて暮らしていたらしい。

おそらく、この兄妹もボルジア家についての全てを知っているわけじゃないだろうし、語っているわけでもない。

絶対に話してはいけないものについては口にはしていないと思う。

ただ……私の口添えで、おそらく貴族位と財産を不当に奪った相手を罰して、ボルジア家の家門も継げるかもしれないと言言葉には、彼等は強く拒否反応を示したのだ。

——自分達の手で、復讐を終わらせなければ何も始まらない……と。

思ったよりも闇が深いというか。

この王国の王都には、大きな犯罪組織があることは知っている。そ

して、暗殺者集団といえば帝国のイジヤニーヤが有名だ。

ボルジア家がそのどちらかに所属していたのかはわからないけれど、少なくともどこかしらの組織に所属していたのであれば、ボルジア家が殺された”落とし前”みたいなものはつけるはずなのに特にそんな様子はない。

今でも、男爵位を継いだあの家は栄華を誇っている。

ということは逆にあの家こそ、どこかの犯罪組織につながっているんじゃないだろうか？ という疑問すら浮かぶ。

下手に手を出すと、私の首を締めかねない。

締めかねない……のだけど。私は、この兄妹を捨てる気には到底なれなかった。

だって、ここに侵入した身体能力や、三年も逃げ続けている気力。おそらく、私がここで手を差し伸べなくとも、彼等は自分達の力で裏社会でのし上がっていけるくらいの凄いポテンシャルを持っているのだろう。

ただ、その時に彼等は兄妹として過ごしているのだろうか。

復讐を果たし、成り上がった時に生き残っているのはどちらか一人になっているのではないのだろうか。

仲良く喧嘩する兄妹二人を見ながら、私はそう思うのだ。そして、それは寂しいと思う自分がある。

私は、この世界では兄がいるけれど、決して仲が良い訳では無い。

平民嫌いで我儘、そして横暴なバルブロお兄様。

それでも、何か切っ掛けがあったのか……一応ただの政略結婚の相手だったはずの婚約者を愛して大切にしているみたいだし、最近では時々修練場でブレインに剣を指導してもらっていると聞いて目が点になった事件があった。

怠惰で勉強も鍛錬も大嫌いなザナツクお兄様。

腹違いだったのは予想外だったけど、本人はもしかして既に知っているのかも知れない。だから、怠け者の振りをし続け、第一王子に叛意はない振りをしているのかも。

そう考えると少し見方も変わってくる。でも、ザナックお兄様と会うことはほぼ無いから真意はわからない。

そして、会うことがなかった亡き兄。

貴方はどんな姿でどんな性格だったのですか。

もしかしたら、私のような前世持ちではなかったのですか。

バルブロお兄様やザナックお兄様達よりも仲良くできたかもしれないし、むしろもっと仲は悪かったかもしれない。

叶うことなら、処分されずに新たな身分で平穏に生きていればいいけれど、そんな面倒なことあの正妃が指示するとは思えない。

指示するなら、取替子の実行犯と思われる侍従長が殺されることもなかったはずだもの。

……………あー、もう！

考えすぎたのか、頭がくらくらするし、すごく眠い。多分、体力がそろそろ尽きるんだと思う。本当に幼女の身体は不便だ。

まあ、一年前の三歳の時よりはマシだし……五歳を超えればもう少し体力がつくはず……

まあ、いいや。

私の手を取ってくれるかはわからないけれど、この二人を部下にしよう。

そのためなら、復讐の手伝いだっしょう。

復讐は何も産まないという言葉があるけれど、私は復讐は被害者が先に進むための心の平穏を得る方法の一つだと思う。

なにせ、私は”ざまあ”な物語は大っ好きでしたから。

私は反省はしても、後悔はしない。

なんで、詰んでる国から逃げようとしているのに、こうやって余計なものを抱え込もうとしているんだらうね、私。

あ。

だめだ、これこのまま寝落ちする……
そして、そのまま私は冷たい床に倒れ込んでしまったのだった。